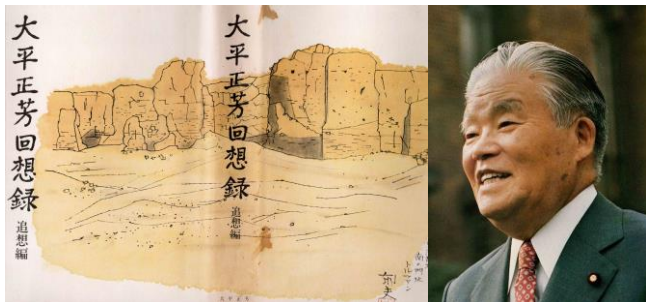


甲状腺外科草子 154 哲人宰相：大平正芳余話⑮

杉野 圭三

生前「アーウー宰相」など揶揄された大平だったが、逝去後に極めて高い評価を受けることとなった。歴史的評価は多数の出版物に譲ることとするが、個人的な多くの逸話が家族、友人、知人たちから世に出てきた。

大平正芳回想録は伝記編、資料編、追想編の三部作からなる。この中の**追想編**は一周忌の昭和 56 (1981) 年 6 月 12 日に刊行された。



追想編の**題字**は井上靖、表装は平山郁夫の「交河故城 南の門址トルファン」、挿絵として奥田元宋の「富嶽」、荻須高徳の「パリーの街角」が入れられ、編集委員会の並々ならぬ熱意が伝わるものである。



奥田元宋

荻須高徳

カーター大統領

寄稿した人々は 200 名余、カーター大統領の直筆メッセージが巻尾を飾る。知人たちの文章の一部を記す。



鈴木善幸



伊藤正義



中曽根康弘

序：鈴木善幸 (第 70 代総理)

万巻の書を読んで理想を求め、信義を重んじて馥郁とした友情を育み、人生を愛して永遠の今に生きた先生の人生は、清冽であり、芳醇であり、崇高でありました

巻頭：伊藤正義 (元内閣官房長官)

大平総理は温かい思いやりのある人柄、一度熟慮して決めたことは迷わず実行する性格、自己顕示を極端に嫌うハニカミ屋、争いを好まず包容力に富み、およそズルイということとは正反対の誠

実な人柄でありました

中曽根康弘 (第 71-73 代総理)

日中航空協定や財政処理であえて泥をあびることをいとわなかった。男子の本懐を悟られて、不惜身命の域に達せられたのであろうか。“落日燃ゆ”であったのであろうか。

大平さんは「鈍牛」といわれたが、それは側近がつけた PR 用のあだ名であった。実際は聖牛であったと思う。良心の放射能をあびて、常に自分を反省し、自分をさいなんできた求道者であったように思う。



後藤田正晴 安部晋太郎 福田赳夫 宮沢喜一

後藤田正晴 (元内閣官房長官)

平素は立派なことをいい、立派な人物だとみられている人が、いざ鎌倉という重大事に臨んで、案外、遅疑逡巡したり、あるいは、感情にとらわれて判断を誤ることの多いのが世の常である。大平さんは大事に臨んで平常心を失わぬ自然体の人であった。国の運命を委せて間違いのない人物であった。政治家として戦場における死ではあったが、惜しい人を失ったものである。

安部晋太郎 (元外務大臣、幹事長)

三木内閣のとき私ははじめて入閣して農林大臣になりました。中略。ところが、物価二ケタ台という情勢のなかでは生産者、消費者団体からの反発が強く、生産者団体の人たちからコメを投げつけられるという一幕もありました。そのとき大平さんは大蔵大臣でしたが、「任怨・分謗」という文字を示して終始私を励ましてくれました。

任怨・分謗 (にんえんぶんぼう)：怨 (うら) みを任じ、謗 (そし) りを分かち。大事を行う時には誰かの怨を受けることは当然で、恐れては何もできない。怨も一心同体で分け合って受ける気概が必要。

福田赳夫 (第 67 代総理)

大平君は信用できる人であった。何事でも頼んで承諾されたことは、全く安心できた。政界で二人の関係には、好天の日も嵐の日もあったが、私は「大平君は信頼できる人だ」といい続けてきた。今もなおそう信じ、そういつている。

宮沢喜一 (第 78 代総理)

大平さんの晩年はまことに輝かしいものであった。しかし栄光のライトに照らされながら、心は別の人生を夢みているような、そんな瞬間が時々あった。

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2025 年 10 月 9 日